

イースター峰起とシン・フェインの政治理念

渡 辺 忠 夫

南アイルランドの首都、Dublin での 1916 年のイースター峰起はアイルランド義勇軍、シン・フェイン党员、共和主義者、労働組合、アイルランド民族主義者の混成からなる現代アイルランドへの推転、革命と言えるのではないか。なぜか。この論者の主題はしたがって、革命への必然性、内在性、評価となろう。この主題は土台となるシン・フェインの政治的理念をも問うことになる。

まず、1916 年前後のアイルランドはじめとしてアイルランドの反乱の歴史記述から始めたい。

1905 年、Arthur Griffith による Sinn Fein 党の結成。この政党はイギリスからの独立、平等、分離を理念とする。アイルランド語では“ourself”を意味し、かならずしも共和主義を信条としていない。フィニアン (IRB)、IRA とは一線を画している。なぜなら、武力斗争、武装主義の否定であり、政治的、経済的自立に重点をおいている政治集団である。しかし、ナショナリズムであることには変りがない。

1913 年、James、Connolly、James、Larkin が Dublin でストライキを打つ。しかし、経営者、William Martin Murphy に“工場を閉塞され”失敗に終る⁽¹⁾。

1914 年、世界第一次大戦始まる。

1914 年、9 月 18 日、アイルランド自治法案が 2 つの条件のもとに成立した。2 つの条件の 1 つは戦争中は実施しない。もう 1 つは、北アイルランド、とりわけアルスター地域は修正事項つきで議会に提出されるが実施はされない⁽²⁾。

1918 年イギリスはアイルランドに徴兵令を発動しようとした。しかし、カトリック、労働組合、シン・フェイン、IRB、IRA の総反対で中止。シン・フェイン党の Arthur Griffith を除き、共和主義者 Patrick、Pearse、社会主義者の James、Connolly、James、Larkin、Mac Neill 率いるアイルランド義勇軍、Michael Collins、Eamon de Valera。この他にも、Roger Casement、Thomas Mac Donagh、Joseph Mary Plunkett があげられよう⁽³⁾。

イースター峰起の契機は周知のごとく、第一次大戦でかねてからの自治法案が英議会を通りながらも実施が見送られたことへの反逆とも受けとれる。しかし、アイルランド議会党の John Redmond は英国の戦争協力に参加を申し出た。アイルランド自治への返礼として当然の協力と考えたらしい。この協力は峰起のメンバーとはまったく相反するのである。ピアス、コリンズ、ヴァレラはすくなくともイギリスの「ピンチ」はアイルランドの「チャンス」くらいの政治的配慮はもっていたと言って

ようであろう。

ところで、イースター峰起は一週間で鎮圧されはしたけれどもいくつかの評価ができる。過去、数世紀にわたる英国への反逆の総括である。

第1は、Thomas Davis を指導者とする“青年アイルランド党の峰起”“Young Ireland” movement, sought to create a national literature in English for Ireland...he urged his followers to go back to the traditions and cultural heritage of their forefathers to find the basis for a new Irish culture...To Irishmen of the time, who saw themselves as the oppressed victims of British imperialism,...The death of Davis in 1845, the the famine which began the next year...⁽⁴⁾

第2。Wolfe Tone は、共和主義者、革命家であり、“the Society of United Irishmen” の創立者である。フランス革命に共感し、宗教の平等、人間、思想、平等を唱導した。

1791年“統一アイルランド人協会”をまずベルファスト、ついでダブリンに同じ協会が設立された。

ウルフ、トーンはアイルランドの共和主義の主導者であり、英国から自由、独立、分離を求める急進主義者であった。1794年にフランスのスパイの汚名を着せられそうだったが、アメリカに脱出し、フランスに渡った。革命の機は熟していると考え、フランスから帰国する。が逮捕される。自殺してしまう。

第3。ウルフ・トーンの革命思想を継承した“統一アイルランド協会”の一員である Robert、Emmet が会員を率いて英国行政府のあるダブリン城を1803年攻撃し、判事ひとりを殺害した。結果は公開の場での絞殺刑であった。

しかし、“統一アイルランド”の反乱、共和主義の思想はアイルランドに民主主義の生きたモデル、元型を与えたことは止目に値する。たしかに反乱は失敗した。しかし、英国の1801年の“統合”への対応政策を考えてもトーンの「統一アイルランド協会」の組織、反乱がアイルランドの植民地化に今後、問題をひき起す主因となると案じたのではあるまいか。

第4。1867年フィニアンズのダブリンでの峰起。しかし、この峰起も失敗に終る。問題なのはこれまでの反乱と異なり、計画的で、継承性があったことである。つまり、“アイルランド共和主義者同盟”、IRBを巧みに軍事的、政治的にイースター峰起まで持続させたことである⁽⁵⁾。

フィニアンズの組織の主導者は James Stephens である。スティーブンスは1858年3月17日、ダブリンでつぎのように起草文を書いている。

私は、いままさに建国されたアイルランド共和国に厳しゅうなる忠誠を誓う。その領土と独立を守るために、命令によって直ちに武器を手に取り、上官の命令に絶対的に服従する。そして。最後に私は自由のために戦う真の兵士という精神をもつことを誓う。神よわれを助けたまえ⁽⁶⁾。

もう1人の組織者は、J. O' Mahony でアメリカのニューヨークで IRB を設置し、援助金を集めていた⁽⁷⁾。

ついでながら、IRBの愛称フィニアンズはケルト時代のアイルランドの伝説的な武士団フィアンナに由来している。フィニアンズは武力以外の手段を認めず、アイルランドの自由、平等、独立、分離を反英斗争を通して求めつづけた。しかしカトリックとの対立、不協和はイースター峰起まで続い

た。

Terry Eagleton は *Heathcliff and Great Hunter* のなかでイースター峰起をつぎのように論述、評価している。

1916 was its coffin as well as its cradle, wiping out some of its most gifted and radical leaders⁽⁸⁾.

正しい指摘ではある。しかし、かならずも全面的に肯定できない。たしかに形式的軍事法定のもとで 26 名が処刑されていることは人道的に許るされざる国家犯罪である。才能に恵まれ、急進的な Patrick、Pearse、James、Connolly、James、Larkin、Sean、Connolly の死は何ものにもかえがたいことは事実である。しかし、アイルランドの近代化。イギリスからの自由、独立、平等、分離は数世紀にわたるアイルランドの悲願ではなかったか⁽⁹⁾。

しかもアイルランド共和国の形成者をイースター峰起は育てているのである。例の Arthur、Griffith、Michael、Collins、De、Valera。いずれも 3 人もアイルランド共和国の大統領をつとめたナショナリストであったと言えよう⁽⁹⁾。

まずイースター峰起の評価について表述しておきたい。

イースター峰起はすでに記したごとく過去の反乱の総括であり、1914 年の自治法案の棚上げへの反逆と言えよう。ナショナリズム、共和主義、シン・フェイン、フィニアン、労働組合の混成が実体である。指導者は、ことわるまでもなく、Patrick、Pearse である。しかし、一週間たらずで鎮圧されてしまう。逮捕され、軍法会議にかけられピアス、コノリー、ラーキン他 16 名が処刑されて終る。

この処刑をめぐる 3 つの問題が提起される。16 名の処刑者が、しかも大戦の間に出たことである。アイルランドの多数の農民は大戦中のこともあり峰起には関心が少なかった。しかし。支配者、英国の省略した処刑のありかたに反発を覚えた。特にカトリック教徒、司祭はシン・フェインが峰起には賛同しなかったと知りこれまでの誤解、対立から支持をはじめて認めた。(つまり、峰起、処刑を契機に) シン・フェインとカトリックとの和解が成立した。いまひとつは、ピアスをはじめ他の処刑者が殉教者として敬われるようになったことである。この処刑者の殉教、犠牲の相関はピアスが復活祭に峰起をあてたのは偶然によるものなのか。キリストの死と復活、ならびに中央郵便局に復刻された古代ゲーリックの勇者“クーフリン”も殉教者であったことは事実である。いずれも聖者として崇められたと言われている。

イースター峰起以後、シン・フェイン党に変化が表じた。峰起の実体上から己むを得ないことであろう。

1917 年にシン・フェイン党大会が開かれた。メンバーに共和主義者が参加し、グリフィスが峰起に反対したこともあって、質的に変わったことに注視されなくてはならない。

まず、総裁は de Valera、副総裁、A. Griffith。

執行委員には M. Collins、カトリックの司祭が選出された。代議員数は約 1700 名と記述されている⁽⁹⁾。アイルランド義勇軍の実権は IRB が握り、コリンズが IRB の組織局長となった。したがって、アイルランド独立戦争の間、渡米している Valera に代わり IRB を指揮したのはコリンズであった。

しかも、IRB が順次 IRA の軍事組織と変質する結果となった。もともと、アイルランド義勇軍の表と裏の関係にあったと言ってよいであろう。

終りにシン・フェインの政治理念を総括し、本論を閉じることにしたい。

1922年アイルランドはイギリスからの独立戦争で自由を勝ち取った。しかし8月にはこの自由に貢献した2人の共和主義者の死に直面している。A. Griffithの病死、M. Collinsの暗殺、シン・フェイン党の政治理念は1916年のイースター蜂起の主導者パトリック・ピアスの共和主義の宣言に端的に表記されていると言ってよいであろう。この蜂起は繰り返えすことになるがウルフ・トーン、ジェームズ・スティーブンソン、ロバート・エメット、トマス・デヴィスのイギリスからの独立、平等、分離、自治への武力闘争の継承にあったと言えよう。

我々は武力行使の考えや武器を見ること、武器の使用に慣れなければならない。流血はものごとを清め、神聖化するものであり、流血を恐怖とみなす国家は男らしさを失っているのだ。……たとえば英国人が我々アイルランド人を打ちのめすことができるとしても、我々アイルランド人はまた立ち上がり、戦いを再開するであろう。英国人はアイルランドを征服することはできない。英国人はアイルランド人の自由への情熱を減ぼすことはできない⁽¹⁰⁾。…

1920年の5月、6月の選挙でシン・フェインは圧勝し、権力を握り、共和国の正当な（de jure）政府であるだけでなく、事実上の（de facto）政府となったのである⁽¹¹⁾。

アイルランドとイギリスの1921年の条約、1922年の自由国の成立、グリフィス、コリンズの死、シン・フェインの分裂。いずれ、あらためて論及したい。本論ではイースター蜂起を主題とし、イギリスの圧政のもとシン・フェイン党が政治の世界を主導したことがアイルランドを共和国に樹立せしめた過程を証しえた言えよう。北アイルランド問題は視点も異なり、結末も予測しえないリアリズムが混在している。今はひたすらヨーロッパ共同体との絡み合いのなかで北アイルランド問題を直視し、鑄直しをはかるしかない。

注

(1) A. Griffithはこの1913年のダブリンのストライキに反対であった。労働組合が弱体であり、経営者側が“lock out”できる体勢にあにあることをあらかじめ知っていたのである。しかし、James Larkinは北アイルランドのベルファストの労働運動を指導するため、1907年にイギリスの全国ドック労働組合のオルグとしてリバプールから来て数年しかいない間にダブリン・ストライキが強行された。たしかに労働問題とアイルランドの自治問題が1913頃、関連はふかくなっていたことは事実である。堀越智が言及しているように、アイルランド労働組合議を通じて、ベルファスト労働者とダブリン労働者の連帯が進んでたことも事実であろう。『北アイルランド紛争の歴史』（評論社、東京、1983年）pp.54-5.

(2) 修正事項とは、自治法はアルスター九州全体には適用されない。アルスターのユニオニストの地域にだけに適用されるだけでよいのである。プロテスタント支配の体制の継続が自治の反対の真相であった。この真相がアイルランドの南北の分離を固定させ、北アイルランドのイギリスからの独立の阻止をさせたのである。堀越智、『同書』参照、pp.65-6.

(3) Richard, Fallis, *The Irish Renaissance*, (Syracuse, New York, 1977), p.79.

(4) *Ibid*, pp.50-1

(5) *Ibid*, p.25.

- (6) 高神信、『大英帝国のなかの「反乱」－アイルランドのフィーニアンたち』（同文館、東京、平成 11 年）、p.17.
- (7) 同書、p.46.
- (8) Terry Eagleton, *Heathcliff and the Great hunter* (Cverso, London. New York, 1996), p.291.
- (9) 堀越智『アイルランド独立戦争 119-21』（評論論社、東京、1985）、pp.25-8.
- (10) 鈴木良平『アイルランド問題とは何か』（丸善ライブラリー、平成 12 年）、pp.67-8.
- (11) 堀越智、同書、p.112.